

「ロータリーの危機」

2012.1.18 高萩 R C ロータリー情報・研修委員会

最初 4 人でスタートしたロータリー運動も、100 年余の年輪を重ねて今や 120 万人の会員をようする大きな組織に発展しました。その間決して順調に発展してきたわけではなく、何回も分裂や縮小や解散などの大きな危機に遭遇しながら、先達の弛まぬ努力の積み重ねによって、その危機を回避しながら今日に至りました。

今回は、危機を回避した歴史を紐解きながら、できるならば、現在日本では会員減からロータリー活動の停滞とか危機とか言われていますが、どのようにしたらよいかについて考えてみます。

——今回の参考資料：R I 第 2680 地区パストガバナー田中 毅氏（尼崎西 R C）主宰の
2010 年 1 月の源流セミナー「ロータリーの危機」他から引用——

< 1. 会員数の現状について >

微増傾向を示してきた世界のロータリアン数ですが、2009 年以降は減少傾向になってきました。2010.7～2011.6 の一年間では、世界でも、日本でも、地区でも会員は減少しています。

世界のロータリアン	(2010.6.30)	1,227,563 人	(2011.6.30)	1,223,413 人	(-4,150 人)
日本国内の	〃	(2010.6.30)	89,381 人	(2011.6.30)	87,952 人 (-1,429 人)
第 2820 地区の	〃	(2010.6.30)	2,115 人	(2011.6.30)	2,066 人 (-49 人)
アメリカの	〃	(2010.6.30)	360,790 人	(2011.6.30)	352,313 人 (-8,477 人)

<特に、アメリカと日本が大きく会員数を減らしています>

ロータリー大国を自認していた日本でも、ロータリアンの減少からロータリー運動に陰りが出てきた(?)ことは大きな問題でしょう。日本においては、1996 年の 13 万人から大きく減少していますので、ロータリー・クラブの存亡が問われているのではないのでしょうか。

< 2. 会員減少の原因 >

①健康上の問題

メンバーの高齢化、病気、死亡

②家庭的な問題

家族の介護、家庭の事情

③社会的な問題

経営環境の悪化（経済不況や地域の過疎化——仕事が前より厳しく、多忙）

退職・・・定年退職やその他の理由

④経済的な問題

会費その他の経費が負担・・・金が掛かりすぎる

⑤ロータリーそれ自体の問題

フェローシップの欠如・・・会員同士の親睦の欠如、会員間の派閥

クラブ例会の魅力の低下・・・ロータリーに魅力を感じない

奉仕プロジェクトに興味を感じない

ロータリーに対する考え方の不足・・・ロータリー情報が不徹底

< 3. 退会の理由・状況 >

近年、ロータリー歴の長い会員の中には、「ロータリーの魅力がなくなった」、「ロータリーに入っているメリットがなくなった」と感じ、不況や年齢や健康を表向きの理由として、ロータリーを離れていく会員が多いような気がしてなりません。

ロータリアン以外の一般の人たちも、ロータリーに入ることの魅力を感じなくなったので入会希望者も激減しているのではないのでしょうか。

そうはさせじと、メイクアップの期間を延長したり、出席規定を緩めたり、またあまり難しいことを言って退会する会員が出たら困るということで、殆んどロータリー教育をしないので、結果としてだんだん会員の質が落ちていくような気がします。

毎週の例会では、昼食をとって時事問題・政治問題、趣味の話や雑談をして、一時間したらさっさと帰ってしまう。そのようなロータリーの例会に愛想を尽かした会員がロータリーから離れていくという悪循環を繰り返しているのではないのでしょうか。

ロータリーは、職業奉仕を中心にして活動してきましたし、現在もそうである筈なのです。会員は、「有益な事業の基礎として奉仕の理念を鼓吹し」と明記された「ロータリー綱領」を順守することを義務付けられているからです。

しかし、現実のロータリー運動は、職業奉仕はすでに卒業したとして、人類愛に基づいたボランティア活動のみに終始しているように見うけられます。——勿論、人道主義に基づく社会奉仕や国際奉仕の実践活動を否定しているわけではありません。

ロータリーは元々ボランティア活動をするために作られた団体ではありません。RCで活動するから決議 23 - 34 号に抵触するとか、We serve がどうだとか言われるわけで、ボランティア活動を目的とするなら、そのために設立された専門の組織や NGO, NPO など他に沢山ありますから、他の団体で思い切って活動することができるわけです。(——一寸言い過ぎかもしれません)

< 4. 過去におけるロータリーの危機 >

ロータリーの百年余の歴史の中で、いろいろなことがあり、分裂や解散や縮小が問題になったことが何回かありました。それらについて、経緯や解決策等を見てみます。

①**最初の危機**は、1907 年から 1910 年にかけて起こった「親睦か奉仕か」を巡る論争です。

ロータリーは、最初は会員相互の親睦と事業の発展を願った集まりとしてスタートしたことは、1906 年 1 月に制定されたシカゴ RC の定款の中でクラブの目的が

* 会員の事業上の利益の増進

* 社交クラブの性質上、通常付随する親睦及びその他の事項の充実

であったことから明白です。

会員同士の原価による相互取引を推奨し、Statistician (統計係) という役職を設けて、前回の例会以降の会員同士の取引や取引の仲介の実績を報告し、その成果に一喜一憂したという記録が残っていました。

ドナルド・カーターの入会にからんで、社会に対する奉仕という概念が持ち込まれ、アーサー・シェルドンによって奉仕理念が提唱されましたが、親睦・互恵と奉仕・拡大というロータリーに対する考え方について激しい論争がロータリー・クラブの分裂の危機をもたらしました。

ポール・ハリスのロータリークラブの運営方針の転換によって、シカゴクラブはポール・ハリスやシェルドン達の奉仕・拡大派とハリー・ラグルス (入会 5 番目の会員) 達の親睦・互恵派に分裂し、毎回の例会は激しい議論の応酬になりました。混乱した議論の場を収めるためにラグルスが始めたのが、歌を歌う習慣だと言われ、今日のロータリーソングの始まりです。

分裂の危機を打開する方策として、全米ロータリークラブ連合会が設立され、奉仕理念や拡大といったクラブの親睦を阻害する可能性がある事項は、連合会で扱うことによって、ロータリーの最初の危機を脱することが出来ました。

ポール・ハリスが連合会長に、チェスリー・ペリーが事務総長に就任し、チェスはその後 32 年間わたって事務総長として、ロータリーの組織を作り上げました。1910 年連合会 (現在は RI と改

称)は16RCでスタートしたが、2011年5月には200カ国以上で34,164RCまで拡大しました。

②**第二の危機**は、1915年～1923年の奉仕活動の実践を巡る論争です。

1916年のガイ・ガンディカー著「ロータリー通解」の発行により、シェルドンが唱えたロータリーの奉仕の理念が纏められて確定した後は、いかにこの理念を実践に移すかに絞られました。

そこで問題となったのは、職業奉仕と社会奉仕の実践活動を巡る対立でした。

ロータリーの活動は、「職業奉仕の理念に基づいた職業奉仕活動」であるとする一派と、「世の中に不幸な人がいる限りそれを救済するのが先決である」という社会奉仕活動に重点を置く一派の論争です。これは、I serve か We serve か、精神的活動か金銭的活動かにまで発展して、まさにこれもロータリー分裂の危機をはらんだ論争でした。

これは、皆様ご承知の1923年セント・ルイス国際大会での決議23-34号の採択によって、職業奉仕理念をロータリー哲学におくことを前提としながら、一定の枠を設けてクラブの奉仕活動を認めるということでロータリーの分裂を回避したわけです。

③さて、**第三の危機**は、1929年10月の世界大恐慌を契機にした政治・経済的な大きな変化によっておこりました。1929年10月ウォール街の株価暴落に端を発した世界大恐慌は悪化の一途をたどりました。

それと時を同じくして、ロータリーでは奉仕理念の提唱者であったシェルドンが、突如ロータリーを去りました。1929年のダラス大会で He profits most who serves best のモットーを廃止しようという決議29-7号が、RIBIから提案され、これを支持するクラブがアメリカからもかなり出たことや、決議23-34号で制限がかけられたはずの奉仕活動の実践が、「身体障害児童の救済事業」として、同大会で決議されたことが原因という人もいますが、真偽のほどは定かではありません。

シェルドンという偉大なる精神的な基盤を失ったロータリーは、経済不況も加わり、急速にその勢力を削がれていきました。

シカゴRCの入退会者数

1929～30年度	入会者	109名	退会者	58名
1930～31年度	〃	86名	〃	82名
1931～32年度	〃	73名	〃	89名
1932～33年度	〃	62名	〃	101名

1932年12月のシカゴRC会員数630名のうち、半期60%の出席義務を満たさない会員は213名で、クラブ運営そのものが問題含みの状況でした。

その一方で、世界大恐慌は悪化の一途をたどり、1932年の大統領選挙で、共和党のフーバー大統領に代わって、民主党のルーズベルトが政権をとることになりました。

当時のシカゴRCの資料によると、共和党支持者72.59%、民主党支持者8.64%であり、圧倒的なロータリアンの支持を受けていた共和党が破れて、ライオンズの支持が多かった民主党が政権をとりました。

1933年3月にルーズベルトは大統領に就任し、直ちにニュー・ディール政策を打ち出して、金本位制の廃止、TVA開発などの公共事業の創出、国家産業復興法に基づく企業活動と労使関係を規制する政策を実施し、ロータリアンを中心とする実業界と対立関係を深めながらも、一応経済危機を回避したかのように見えたニュー・ディール政策も、結局は功を奏せず、1937年の夏には「恐慌の中の恐慌」と呼ばれるほどの危機的状況になりました。そこでアメリカ政府が選択した道は、当時緊張が高まりつつあった国際情勢を利用して軍需産業を積極的に育成することであり、アメリカ経済は戦時体制のもとで、やっと不況から抜け出すことができました。

すでに新しい企業経営方針を先取りしていたロータリアンは、それほど大きな経済的ダメージを受けることはなく、職業奉仕理念の構築、道德律の制定、事業における道德律の適用、四つのテストといった職業奉仕実践活動も功をそうして、ロータリアン自身が不況に耐えうる実力をつけていましたので、ロータリアン企業は迅速に業績を回復しました。

④**第四の危機**は、第二次世界大戦で枢軸国がロータリーから離脱したことによっておこりました。

1934年から37年にかけて、ポール・ハリスはイギリス、ヨーロッパ、極東（日本には1935年東京、京都、神戸RC訪問）、南アメリカのロータリークラブを訪問しました。この一連の諸国訪問は、ロータリアンの友情によって国際理解と世界平和を目指す試みを、国家間の緊張が高まる中で彼自身が実行したとして、高く評価する向きも多いようです。

しかし、その努力も実らず、1938年ドイツ、オーストリア、イタリアでRCが解散させられ、1939年第二次世界大戦が勃発したのを皮切りに、1940年には日本もRIからの脱退を余儀なくされ、翌1941年にはついに太平洋戦争に突入しました。しかし、日本のロータリークラブは、RI脱退後もその名称を変更して例会を継続し（29RCが例会の曜日や地域名の名称に変更して継続）、戦後の著しい飛躍につながりました。RIという組織に属さなくても、素晴らしい理念に裏打ちされた思想は、人の心の中で生き続け成長することが証明されたのです。

1949年から日本のRCは再加入をはたしました。

（第二次世界大戦後の経済界での変化）

修正資本主義に基づく経済発展はすさまじく、企業は巨大化し、資本家と別に企業経営を専門的に行う経営者が出現します。ここで、従来の資本家対労働者の構図は、資本家対経営者対労働者の構図に変化します。また、企業が巨大化すると各地に支店や出張所ができて、その所長クラスの人たちがロータリーに加わってくるようになりました。サラリーマン社長や所長には絶対的権限がないために、必ずしもロータリーの理念通りに企業経営をすることは不可能となってきました。

元来ロータリークラブは絶対的な権限を持っている企業のオーナーが集まって、理想的な職業奉仕理念を編み出し、それを自らの企業にとり入れて実践するための組織ですから、社会・経済の変化によって構成メンバーが変わってくると、そのような効果が期待できなくなってきました。

⑤1970年代後半からは、徐々に**第五の危機**の時代に突入し、現在もその過程にあると言えるでしょう。

会員数の統計から、1990年代後半からロータリーの衰退が起こったように見えますが、その前に様々なことが起きていました。

- a) 経済システムが変わり、新資本主義の考え方が市場を支配して、ヘッジ・ファンドに代表される利益追求の虚業的投資家が表れて、職業倫理の低下をもたらした。
- b) RIの組織が巨大化し中央集権化してきた。
- c) RIの活動方針が変化し、職業奉仕からNPOとしてのボランティア活動に転換し、財団寄付が重要視されるようになった。
- d) ボランティア活動を効率的に行うようになり、例会や親睦が軽視され、結果としてロータリアンとしての魅力やメリットが低下した。

もはやRIの中にはシェルドンの職業奉仕理念を語る人は存在せず、潤沢な資金を得て人道的奉仕活動の実践をするために、ビル・ゲイツを名誉会員に迎えて資金集めに奔走する風潮は非常に残念です。——田中 毅氏の話

このような歴史的事実から、何を学ばなければならないでしょうか。
確かに日本においては、経済不況が会員減の理由の一つになっていることは間違いありません。

< 5. 日本のRCの活性化について >

—RI はすでに会員相互の親睦も職業奉仕も捨てて、人道的奉仕活動に専念するボランティア組織に転換しているように見えますから、ここでは敢えて、日本のRCを如何にして活性化するかを考えてみましょう—

日本のRCは何故衰退の一途をたどっているのでしょうか。—現時点でのRC活動及び考え方に対する意見を纏めてみました。

いつ倒産の危機に遭遇するかを悩むのは、昔も今も同じです。寧ろ100年に一度の経済危機が叫ばれている現在の方が深刻でしょう。

シェルドンが唱えた奉仕理念は、ビジネススクールでの企業を継続的に発展させる経営学の理念に基づくものですから、ある意味では不況乗切りの鍵を多く含んでいます。

現在のロータリー運動は、職業奉仕はすでに卒業したとして、人類愛に基づいたボランティア活動を優先するあまり、例会が軽視されることも、ロータリーの魅力を削ぐ原因でしょう。

<果たして職業奉仕はもはや必要なくなったのでしょうか>

職業奉仕を前提として奉仕の心を磨く場をロータリーでは例会と呼んでいます。

企業経営上の問題点を胸襟を開いて相談できる環境がクラブ内にあるでしょうか。

自分が直面する問題を親身になって相談できる友人がクラブ内にいるでしょうか。

職業上得られた発想やアイデアを交換し、自分の家庭・職場・地域社会に戻って、それを実践に移していますか。

毎週例会で行うことは、奉仕の理念を研鑽することです。事業上の発想の交換を通じて職業奉仕の理念を学び、その結果として自己改善という教育的効果を得ることができます。これがクラブ奉仕で、固い純粋親睦で結ばれた会員同士が、お互いに役割分担をしながらクラブの管理運営をすることです。そして例会場を出て、それぞれの分野で奉仕活動の実践を行います。(入りて学び、出でて奉仕せよ。) 職業を通して行う奉仕活動の実践を職業奉仕、地域社会で行う奉仕活動の実践を社会奉仕、国際社会で行う奉仕活動の実践を国際奉仕と分類しています。

特に、職業奉仕とは、シェルドンが提唱した企業経営の理念から導き出されたものであり、自分の利益を優先するのではなく、自らの職業を通じて社会に奉仕することによって、その結果として適正で継続的な利益が得られることを説いた考えです。

会員は、事業上の大切な時間を割いて、例会に出席しています。従って、例会出席によって得られるメリットは、事業上の貴重な時間を割くデメリットよりも大きくなければなりません。例会のプログラムを魅力あるものにするによって、どうしても出席したくなるような例会にすることが大切で、その結果出席率の向上に繋がります。

ロータリー活動の原点は個々のRCにあります。RCの評価はどのような奉仕活動をしたか、財団や米山奨学会にいくら寄付したかではなく、クラブの管理運営や例会などのクラブ奉仕を通じて「いかに素晴らしいロータリアンを育てたか」によって決まるのでしょうか。

クラブの自治権を最大限に活用して、地域に根を張ったクラブ管理運営を行うことから、クラブは活性化され、魅力的なクラブの雰囲気醸し出され、その結果「魅力的なロータリアンが集まり、さらにクラブも活性化される」のではないのでしょうか。

ロータリークラブ創立の原点が親睦にあったことを思い起こして、今一度クラブ内に真の親睦を確立する必要があります。

そのためには、いたずらに会員増強に奔走するのではなく、会員の職業分類を含めた会員の資質

を今一度洗い直す必要があるのかもしれませんが。クラブ内にライバルや利害関係に深くかかわる会員が多く存在すれば、真の親睦は成り立ちません。

業界を代表する経営者が会員である原則からは、**会員同士は最高の取引先**である筈です。発足時のロータリーは、取引を会員同士に限定したり、会員同士の取引に特別の配慮を要求することに、世間の批判を浴びたわけで、広げた取引先の中から会員を優先的に選ぶことは、何の支障もありません。業界の中で最も優れた人を会員として選んでいるわけですから、その結果クラブも会員の属する業界も繁栄していくことを忘れてはなりません。

世界で一番高い会費を払って、その上任意だとは言いながら、半ば強制的にロータリー財団や米山奨学会の寄付を割り当てられます。その見返りとして得られるものは、ロータリーの友情と人道的奉仕活動に参加したという達成感かもしれませんが、支払った会費や寄付金に比べて、あまりにも低い世間の評価も、衰退の大きな理由になっているのではないかと思います。

先進国のロータリーの衰退に比べて、途上国のロータリアンの激増は、地域社会のニーズに従って積極的に活動するロータリアンの姿がまじかに見られるからでしょう。

会員の独りよがりではなく、もう一度地域ニーズと向き合い、ロータリーの活動の中でどう応えていけるか考えることが必要でしょう。

高級ホテルにおける例会、豪華な食事、多額な事務所経費等運営費用にも大きな問題があります。前例の見直しやIT環境の整備などによる費用節約の必要があります。

ロータリーの創立当初、また日本では敗戦後ロータリー運動が盛んになったのは、会員になると大きなメリットがあったからであり、再びこのメリットを取り戻すことが、ロータリー運動を活性化させる最善の方策ではないでしょうか。

< 6. ロータリーに入るといいことがある >

——1916年発行の「A talking Knowledge of Rotary」ガイ・ガンデイカー著（日本語訳小堀憲助訳——ロータリー通解）の「ロータリークラブの特典」から引用して、長崎南RCが解りやすいように文章・表現を編集したもの——

- ①人生で、是非とも持たねばならない知己が得られる。
- ②純粋で健全な親睦というものがどんなに良いものかを知ることが出来る。
- ③どうすれば仕事が成功し、問題解決が出来るかについて、啓発を受けることが出来る。
- ④効率の高い経営方法とは何かについて、知らず知らずのうちに教育が受けられる。
- ⑤多くの自分の知らない情報が得られ、先見の明を授けられることが出来る。
- ⑥自分の思考の限界を自覚し、もって転機を得ることが出来る。
- ⑦知己を広め、自分を他に理解してもらい機会が与えられ、そのことが自分の企業に対する信頼を呼ぶことに繋がり、その結果として企業上の利益となる。
- ⑧各自が社会の指導者となるだけの訓練を受けられる。
- ⑨自分を人間的に磨くことが出来る。